ごあいさつ



気仙沼信用金庫第100期の業務報告にあたり、会員皆様方の日頃からのご愛顧に衷心より厚く御礼申し上げます。

さて令和７年度を振り返りますと、国内経済においては、企業の設備投資や雇用環境の改善、賃金の上昇が個人消費を下支えし、内需を中心に緩やかな回復基調を維持しました。

また、金融面では、金融政策の正常化が段階的に進行し、これにより金利水準の上昇が進み、収益状況におきましては資金運用利回り等、一定程度改善が見られました。しかしながら、一方で、資金調達コストの大幅な上昇や市場運用環境の変化による含み損の拡大等への対応が求められた年でありました。

地域経済に目を向けますと、当地域基幹産業の水産業関連では、主力水揚げ魚種でありますカツオの歴史的不漁により、28年連続で維持してきた生鮮カツオ水揚げ日本一の座を失うとともに、水揚げ高は前年度実績を大幅に下回り、水産加工業や流通業など地域経済を支えている事業者の経営に大きな影響を与えました。ほかの事業者においても、震災とコロナによる二重債務、歯止めがかからない人口減少や少子高齢化による経済縮小など、なかなか出口が見えない課題を抱え、先行きへの不安感を払拭することができない状況でもありました。

そのような中、当金庫運営におきましては、東日本大震災以後、加速度的に進んでいる人口減少による地域経済の縮減懸念課題に立ち向かうべく、地域事業者の状況をしっかり把握し、資金繰り支援をはじめとした事業者の経営力強化に向けた伴走支援にこれまで以上に傾注し役職員一丸で取り組んでまいりました。

令和７年度の当金庫の業績でございますが、預金残高は粘着性の高い預金獲得を目的として優遇金利を取り入れた定期預金や定期積金の新商品の販売のほか、地公体預金の獲得推進等より対前年比34億円増加の1,354億円と２期連続して対前年末残高を上回ることが出来ました。また、貸出金残高は積極的な資金繰り支援や各種キャンペーン等の推進を図ってまいりましたが、新規の設備資金等の需要の低迷に加え、ゼロゼロ融資等の返済が進む中で、真水分の開拓がそれに追いつかず前年度比４億円減少の499億円となりました。損益状況では、金融政策の正常化に向けた、金利水準の上昇が進み、資金運用利回りなど、一定程度、改善が見られた一方で、資金調達コストの上昇や、市場運用環境の変化による含み損拡大への対応から、最終損益では２千７百万円の利益計上となりました。また、令和８年２月に優先出資消却を実施しております。なお、金融機関の健全性を示す自己資本比率は、国内基準の４％を上回る10.16％となり、盤石な経営基盤を維持しております。

今年度においても、金融政策の正常化の進展が予想され、金融機関間の競争がさらに激しくなることが想定されます。気仙沼信用金庫が100年という長い歴史を歩むことができたのは、先人の努力はもちろん、それを支えていただきました会員皆様方のおかげであります。地域の環境はもちろん、私たちの事業環境も日々変化しております。しかしながら、気仙沼信用金庫の経営理念である「共存同栄」この理念は、この先も変わらず一貫して経営の柱として掲げ、時代の変化を見据えながら、これまで以上に金融仲介機能の発揮と、地域金融機関としての存在感を遺憾なく発揮し、地域の持続的発展に向けて役職員一丸となって貢献してまいる所存ですので、会員の皆様方には、なお一層のご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

結びに会員皆様方のご健勝での益々のご活躍とご隆盛をこころよりお祈り申し上げ、ごあいさつといたします。

令和８年６月

気仙沼信用金庫

理事長　小山　栄太郎